ＪＲ東労組横浜地本青年部情報

Truth ～真実～

ＪＲ東労組
横 浜 地 本
公 式 Ｈ Ｐ

第３０号
２０１９年８月１８日発行

発行責任者　岡本　洸太
編　集　者　教　宣　部

終戦から７４年

８月１６日朝日新聞

社説 Editorials

戦没者の追悼 「深い反省」受け継いで

終戦から74年。きのう東京で開かれた全国戦没者追悼式に天皇陛下が即位後初めて出席し、「おことば」を述べた。

昨夏までの30年間、上皇さまは一言一句に推敲を重ね、この日のおことばに思いを注いできた。戦後50年の節目となった1995年に「歴史を顧み」、そして70年の2015年には「さきの大戦に対する深い反省」という一節を盛り込み、過去を直視する姿勢を内外に示した。

そして今年。戦後生まれの陛下も「過去を顧み、深い反省の上に立って、再び戦争の惨禍が繰り返されぬことを切に願い」と、平成の時代の表現をほぼ受け継いで不戦を誓った。

自国だけでなく他の国々、とりわけアジア太平洋諸国に与えた損害と苦痛を忘れない。その気持ちを言葉に込めることで、国際協調を重んじる考えに変わりがないと宣明したといえる。

一方で、安倍首相の式辞には今年も「反省」の文字はなかった。第1次内閣当時の07年夏は口にしたが、12年末に再び政権に就いた後は、近隣諸国への言及ともども姿を消した。代わりにあるのは、「子や孫、そしてその先の世代の子どもたちに、謝罪を続ける宿命を負わせてはなりません」（戦後70年の首相談話）との思いだ。

だが国民の代表者である政治家が、負の歴史から逃げず、真摯に受け止める態度を表明し続けてこそ、謝罪が不要な関係を結べるのではないか。右派層に厚い支持基盤をもつ首相である。先の世代のために、今やるべきことがあるはずだ。

式辞で目を引いたのは広島・長崎の原爆や各都市への空襲とあわせ、沖縄での地上戦の犠牲に触れたことだ。過重な基地負担に苦しむ沖縄の原点に、第2次大戦とその後の米軍統治がある。県民の思いにこたえる具体的な施策を講じることで、式辞が形だけのものではないと証明してもらいたい。

首相はまた、戦地に残る元兵士らの遺骨の一日も早い帰還に「全力を尽くす」と述べた。だが現実はどうだろう。

シベリアに抑留された人々のものとされた遺骨について、日本人ではない疑いが浮上している。専門家の指摘を受けながら厚生労働省は放置し、ロシア側にも伝えてこなかったという。国籍を問わず、戦争犠牲者への敬意を欠く行いであり、政府として厳正な対処が必要だ。

きのうの「追悼の辞」で、衆参両院議長はそろって日本国憲法の平和主義に言及し、その実現に全力を尽くすと約束した。歴史に学び、反省を踏まえ、憲法をいかす。未来に向け、平和を守り続けるために何が必要かを考えさせる式典となった。

2019・8・16

戦没者追悼式　首相式辞（全文）

天皇皇后両陛下のご臨席を仰ぎ、戦没者のご遺族、各界代表、多数のご列席を得て、全国戦没者追悼式を、ここに挙行いたします。

先の大戦では、三百万余の同胞の命が失われました。祖国の行く末を案じ、戦陣に散った方々。終戦後、遠い異郷の地にあって、亡くなられた方々。広島や長崎での原爆投下、東京をはじめ各都市での爆撃、沖縄における地上戦などで、無残にも犠牲となられた方々。今、すべての御霊（みたま）の御前にあって、御霊安かれと、心より、お祈り申し上げます。

今、私たちが享受している平和と繁栄は、戦没者の皆様の尊い犠牲の上に築かれたものであることを、私たちは決して忘れることはありません。改めて、衷心より、敬意と感謝の念を捧げます。

いまだ帰還を果たされていない多くのご遺骨のことも、決して忘れません。ご遺骨が一日も早くふるさとに戻られるよう、私たちの使命として全力を尽くしてまいります。

我が国は、戦後一貫して、平和を重んじる国として、ただ、ひたすらに歩んでまいりました。歴史の教訓を深く胸に刻み、世界の平和と繁栄に力を尽くしてまいりました。

戦争の惨禍を、二度と繰り返さない。この誓いは、昭和、平成、そして、令和の時代においても決して変わることはありません。平和で、希望に満ちあふれる新たな時代を創り上げていくため、世界が直面している様々な課題の解決に向け、国際社会と力を合わせて全力で取り組んでまいります。今を生きる世代、明日を生きる世代のために、国の未来を切りひらいてまいります。

終わりに、いま一度、戦没者の御霊に平安を、ご遺族の皆様にはご多幸を、心よりお祈りし、式辞といたします。

令和元年8月15日　内閣総理大臣　安倍晋三

朝日新聞

不戦の誓い 令和も

令和になって初めての終戦の日。政府主催の全国戦没者追悼式が15日、日本武道館（東京都千代田区）で開かれ、全国の遺族ら約6200人が参列して約310万人の戦没者を悼んだ。5月に即位した天皇陛下が、皇后さまとともに初めて出席。「深い反省」の上で平和を願う「おことば」を述べた。

▼7面＝元捕虜の人生紡ぐ、10面＝社説、26・27面＝愚かさ伝えたい

戦没者追悼 「深い反省」を継ぐ戦後世代

全国戦没者追悼式に臨む天皇、皇后両陛下＝15日午前11時52分、東京都千代田区の日本武道館、迫和義撮影

首相、加害触れず

戦後74年を迎えた追悼式で、天皇陛下は「深い反省の上に立って、再び戦争の惨禍が繰り返されぬこと」を切に願うと述べた。上皇さまが2015年から用い始めた「深い反省」という表現をはじめ、上皇さまのおことばをほぼ引き継いだ。

安倍晋三首相は式辞で、広島と長崎への原爆投下や沖縄での地上戦などに初めて言及した上で、「戦争の惨禍を二度と繰り返さない。この誓いは、昭和、平成、そして令和の時代においても決して変わることはありません」と誓った。だが、アジア諸国への加害と反省には7年連続で触れなかった。1993年の細川護熙氏以降、歴代首相は加害責任に触れ「深い反省」などを表していた。

追悼式に参列を予定した遺族は約5400人。70代以上が8割近くになる一方、戦後生まれが初めて3割を超えた。

安倍首相はこの日、東京・九段北の靖国神社への参拝を見送り、代理を通じて私費で玉串料を奉納。超党派の「みんなで靖国神社に参拝する国会議員の会」は、副大臣・政務官8人を含む衆参議員52人が参拝した。

天皇陛下　おことば全文

本日、「戦没者を追悼し平和を祈念する日」に当たり、全国戦没者追悼式に臨み、さきの大戦において、かけがえのない命を失った数多くの人々とその遺族を思い、深い悲しみを新たにいたします。

終戦以来74年、人々のたゆみない努力により、今日の我が国の平和と繁栄が築き上げられましたが、多くの苦難に満ちた国民の歩みを思うとき、誠に感慨深いものがあります。

戦後の長きにわたる平和な歳月に思いを致しつつ、ここに過去を顧み、深い反省の上に立って、再び戦争の惨禍が繰り返されぬことを切に願い、戦陣に散り戦禍に倒れた人々に対し、全国民と共に、心から追悼の意を表し、世界の平和と我が国の一層の発展を祈ります。

視点

戦後生まれの天皇として、初めて臨んだ全国戦没者追悼式。注目されたおことばは、上皇さまが昨年の追悼式で語った内容をほぼ継承したものとなった。代替わり後も平和への強い思いを受け継いでいくことを示したといえるだろう。

「戦争を知らない世代であるからこそ、風化させないよう一層意識的にならないといけない」。代替わり前、皇太子だった陛下は、皇室関係者らにそんな考えを示したという。上皇さまが続けてきた戦没者慰霊が話題に上ったときのことだった。

陛下は幼少期から、上皇ご夫妻とともに沖縄の子どもたちと交流し、ご夫妻から戦争にまつわる話を聴いた。毎年、「沖縄慰霊の日」「広島、長崎原爆の日」「終戦の日」の「四つの日」には皇后さま、愛子さまと黙禱を捧げている。

この日のおことばでは、上皇さまが戦後70年以降の式典で毎年繰り返した「深い反省」という文言を再び盛り込むなど、全体を大きく変更しなかった。象徴天皇を研究する河西秀哉・名古屋大学大学院准教授は「平成の天皇の思いを評価し、共有していることの表れ」とみる。

一方で、陛下自身の考えや思いが垣間見える文言もあった。現在の日本の平和と繁栄が築かれた要因として、上皇さまは「国民のたゆみない努力」をあげていたが、陛下は「人々のたゆみない努力」と言い換えた。河西氏は「日本国籍を持つ人々だけでなく、あらゆる人々の努力を評価する思いを込めたのではないか」と語った。

戦争を知る世代が少なくなり、この日の式も参列を予定した遺族の3割が戦後生まれだった。昭和、平成を通じて皇室が大切にしてきた平和への祈りを、令和にどのように国民と共有していくのか。陛下の取り組みを見つめていきたい。（中田絢子）

８月１５日、終戦から７４年をむかえた。全国戦没者追悼式が開かれ、天皇陛下はおことばで「深い反省」を受け継いでいる一方で、安倍首相は今年も加害については触れなかった。戦争の悲惨さだけではなく、戦争が引き起こされた背景を見る必要があります。

労働組合も諸手を挙げて戦争に加担した歴史があります。その結果、多くの市民・労働者の命が奪われました。いつの時代も戦争被害に遭うのは立場の弱い人たちです。そして、ＪＲ東日本は有事の際は、戦争に協力する規則もあります。鉄道は標的になることは歴史が証明しています。だからこそ、東労組は労働組合として、平和について取り組んでいます。

平和なくして労働なし